



ひなどり

園だより 12月号
令和元年 11月28日
新潟市立新津第三幼稚園



できなかったことが、できるようになった瞬間

園長 間嶋 哲

30年ほど前から、日本テレビ系で『はじめてのおつかい』という番組が、時々放映されます。小さな子どもたちが様々な葛藤を持ちながら、おつかいを始めとした「何かができる」ようになっていくドキュメンタリーというのは、大人の心を妙に揺さぶるものです。自分や自分の子ども(孫)が小さかった頃を投影させてしまう心理だと思います。

今年度も、年長組と年中組さんの引率として、亀田公園に行ってきました。自分で切符を手にし、新津駅から電車に乗っていくこと自体が、とても大きな冒険であるはずですが。初めて自動改札に切符を通す経験をする子どももいたはずですが。これも「できるようになった」一つです。

亀田公園には、たくさんの遊具があります。その中でも、一番大きな滑り台があり、滑り下りてくること自体、大人でもかなりのスリルを感じます。その滑り台への登り方も様々あるのですが、ほとんどの子どもが「怖い」という感情になる難所があります。もちろん、あっさりできてしまう子どもがいる一方で、そこに挑戦し続ける子どもも、毎年必ず一定数います。今年度もいました。たいてい私は、その難所に位置し、手助けなどをしてはいますが、自分が怖いという壁を打ち破り、登り切ったときの喜びというのは、その表情や安堵感、達成感などが、こちらまで十分に伝わってくるのです。

今までできなかったことができるようになる…このことは、なんて素晴らしいことでしょうか。私たち大人でも、時々そういう経験をしていくことは大事なことだと思いますが、幼稚園の子どもたちにとっては、そのような積み重ねこそが自己肯定感につながったり、目の前にある困難さを乗り越えたりする気持ちの強さにつながっていくのだと思います。

ところで、お昼ご飯のときでした。私は、年中組の何人かと一緒にいただいていた。ある男の子が、ご飯の後、自分が持ってきたお菓子の袋を開けられずに困っていました。開け方を知らないということもあるでしょうし、少し力が足りないということもあったのでしょう。私は、あえて、どうするか様子を見ていました。すると「ぼくに貸してごらん」と、隣のお友達が声をかけ、あっという間に開けていました。こういう何気ない優しさこそが、とても大事なことなのです。

普段の何気ない生活の中で、できないことができるようになる経験、お友達の気持ちを汲み取り、サッと手を貸してやる経験を、どんどんさせていきたいものです。大人は、すぐに手を出してはいけませんよ。

